

お茶の水女子大学附属幼稚園

保育の研究

第 6 卷

平成 13 年度

お茶の水女子大学附属幼稚園

幼児教育研究会

はじめに

園長 片岡 康子

「保育の研究」は第6巻の刊行を迎えるはこびとなりました。

国立大学附属学校園の将来構想が深刻な現実問題として検討される中で、目の前にいる子どもたちに注がれる教師たちの眼差しには、子どもたちの姿を通して守り育てる未来の子ども像を描きだしたいという意志が漲っているように感じられます。

本年度の研究テーマは「関わりの視点で幼稚園の生活を捉える」です。幼児の関わりのあり方を「自分との関わり・人との関わり」及び「もの・事象との関わり」と広く捉え、各保育者による実践事例を分析・考察して保育の本質を探ることを目的としています。これまでの研究成果、とくに「連携」をテーマにした第3巻から第5巻までの3年間の研究を通して、保育に対する共通認識が深まり、保育が充実してきたことが弾みとなって、本年の研究は一層の進展をみたといえましょう。

また本年度の研究に取り組む上では、附属小学校と共同の開発研究（3年間）がスタートしたことも大きな刺激となりました。幼稚園入園から小学校卒業までの9年間を見据えた教育課程の再編成が研究テーマです。教科のない幼稚園、小学校から始まる教科という枠組、どのような新たなパラダイムによって9年間の見通しをもつことができるのか。まさに幼稚園と小学校の教師それぞれの価値転換に基づく解体・再構築作業の始まりでした。

本紀要は、いろいろな研究を抱えながらも、連携を忘れずに解決の方策を求め続けている、保育者の真摯な姿勢に裏打ちされた実践の問いただしであり、一つ一つの分析・考察からはその根底にある子ども像が浮かび上がります。

本紀要が、変わらない保育の本質を見据えてこれからの保育を展望する情報交流の契機となれば、それに勝る喜びはございません。

目次

はじめに	1
本年度の研究について	3
I 子どもと保育者で創っていく生活	6
II 自己の育ちに目を向ける（葛藤の時をどう支えるか）	17
III 子どもと保育者が創り出す生活	30
IV 保健室の環境	53
V 異年齢の関わり	62
資料 —カンファレンスの抜粋— 7月18日	76
12月12日	83
あとがき	91

本年度の研究について

今年度我が園では、附属小学校と共同で、幼稚園と小学校の連携に関する向こう3年間の開発研究の指定を受けることとなったために、幼稚園独自の園内研究とこの開発研究とを並行して進めなければならない状況であった。そこで、両研究の研究主題、内容、方法、進捗状況等を効果的に関連付けることによって、それぞれの成果をあげることができるよう、また当然の事ながら、研究を進めることが日々の保育の一層の充実につながるようとの配慮と工夫をもって取り組んだことが、本年度の研究体制の特徴とも言えることである。以下にその要点を具体的に述べる。

1. 新たな教育課程の検討

附属小学校と共同の開発研究では、幼稚園教育と小学校教育の望ましい連携を探求するために、幼稚園入園から小学校卒業までの9年間を見通した教育課程を編成することが当初からの課題であった。そこで園内研究の第1段階として、小学校教育を視野に入れつつ幼稚園3年間の教育課程を新たに編成する作業から始めた。

我が園の保育の理念と、日々の保育の中に見られる子どもの姿や状況、また育ちの様子を的確に表すにはどうすればよいのか、研究主任を中心に、従来の教育課程のイメージにとらわれない視点や発想をもって検討に検討を重ねた。その結果、新たな教育課程編成の視座を、本園の保育においてこれまでも常に大切に考え続けてきた「(幼稚園における幼児の)生活」(生活の流れ、生活に取り組む姿勢など)に置くこととしたのである。

さらに、幼稚園入園から小学校教育へ接続する時期までの間に、A:幼稚園の生活に出会い、その中で自分なりに安定していく時期、B:幼稚園での生活の仕方がわかり、安定して生活を広げて行く時期、C:生活の中で関わりあいがある、ところがゆれる時期、D:友だちとの関わりが深まり、生活する楽しさを味わう時期、E:一人一人が充実して過ごし、仲間と共に生活を創り出して行く時期、の5ステージを想定して様々な幼児の姿を捉え、これによって教育課程編成の作業を進めた。上記の5つの時期は、幼児の年齢や幼稚園で過ごす期間の長短と必ずしも一致するものではなく、またいつも一方向的、段階的に進むというものでもないとする考えから、敢えて順次的な数字を使用することを避け、ステージという表現を用いたものである。

「生活」を視座とした教育課程編成の作業は、新たな教育課程を創り出す目的のものであることは言うまでもないが、その過程においては保育者全員が、幼稚園の生活全体を視野としながら、目の前にいる一人一人の子どもの状況(ステージ)や子どもと共に生活する者としての自らの保育を改めて捉えなおすことともなり、保育者の資質をより高め、また保育の場における互いの連携を進める上でも意義深いことであったと思われる。

なお、本園の新たな教育課程案については、今後さらに検討を進めた上で別に報告する機会があるので、本稿ではこれ以上の詳述を避ける。

2. 関わりの視点を設定する

前年度から我々は、幼稚園の生活の中での子ども同士の関わりをテーマとして、事例をもとに、園内研究会を進めてきた。このテーマ設定については、次の背景がある。すなわちここ数年、日々の保育における保育者同士の連携が非常にスムーズであるのと同時に、子どもたち同士の交流もクラスや学年を超えて多様に見られるようになってきたという実感を、各保育者が一様に持っていたことから、検証的に実態を捉えたいとする考えがあった。また、従来どちらかと言えば保育者と子どもとの関係に焦点を当てて保育を語ることが多かった我々の姿勢を、さらに広げて行きたいという思いも持っていた。

一方、開発研究において小学校でも「関わりあって学ぶ力」といった関わりあいの視点を持っていることを考慮し、先の新たな教育過程案では、幼児の関わりのある方を、「自分との関わり・人との関わり」および「もの・事象との関わり」と、広く捉えることを試みた。

以上のような経緯と研究的背景を勘案して、本研究の主題を「関わりの視点で幼稚園の生活を捉える」とした。

また本園には独立した保健室(図書室と兼用)があり、昨年度から専任の養護教諭が配置されている。子どもたちにとって保育室とは異なるこの生活の場はどのような意味を持っているのか、保健室で見られる関わりの事例を通して、幼児の生活の場としての保健室の環境、養護教諭と担任教諭の連携などについても考察を加えた。

3. 事例の活用

従来、日々の保育の記録は各保育者がそれぞれ書きやすい形式で残していたが、今年度は研究資料としての検討作業をも考慮して同一形式で記録することにした。そして、前述の通りかかわりの視点を設定したことにより、園内研究会にもこれまで以上に多くの事例が出され、幼稚園の生活における幼児の様々な姿、保育者の意図や率直な思い等が明らかにされることとなった。中には、一連の流れをもつ活動について、それに関与した複数の保育者がそれぞれの立場からの事例として記したものもあり、幼児の多様な交流や保育者同士の連携など、子どもと保育者で織りなす幼稚園の生活がより重層的なものとして生き生きと浮き上がってくることもあった。

本研究は、こうして蓄積された多くの事例を、前述の教育課程案におけるステージの構想とも連携させながら分類し、分析・考察を行ったものであるが、個々の事例の分析・考察に終わらせるのではなく、特に「生活」の視座をもって考察を深め、保育の本質を探る研究となるよう留意した。

また事例は、附属小学校との共同研究においても利用され、幼稚園の生活や保育について、小学校の先生たちがより具体的な理解を深めることにも役立ったと思われる。

4. 実践者が行う実践研究であること

言うまでもないことであるが、我々保育者は実践者であり、本研究は日々の保育に即した実践研究である。我々は常々、保育者が取り組む保育研究であればこそ、そこに保育者ならではの視点や感覚が意味あるものとして生かされ、また、保育者自身を通してその研究の成果や意義が日々の保育に還元されることが重要だと考えている。

従来本園で継続してきた保育の研究は、主題に基づいて保育カンファレンスと呼ぶ保育の話し合いを重ね、カンファレンスの経過そのものを検討したり、その内容から結論を導き出すという方法をとることが多かった。このような研究の積み重ねから、我々は、保育実践と並行して各保育者が率直にまた自

由感に基づいて自らの保育を語ることでできる保育カンファレンスの場があること、そして保育実践と保育カンファレンスの間に保育者を通して良い循環が成立すること、が保育をより充実したものにして行く上で重要であるという認識を得たのである。すなわち、保育カンファレンスの場が、我が園の保育者として共有すべき姿勢の確認やそれぞれの独自性、主体性の尊重、また自身の保育のより深い洞察などを促し、新たな保育実践を創造することの助けになることを確認したのである。我々はこのように、研究の経過自体がそれに取り組む保育者を通して保育の充実に結びつくような保育研究を重視しているのである。

本年は様々な事情から、研究の各段階において従来のような全員参加の保育カンファレンスを回数多く実施することはできなかったが、数人の保育者が複数事例を共有して十分な話し合いを重ね、それぞれの保育実践に生かすことができるような事例検討をこころがけた。

(梶田 正子)

D：子どもたちが、こういうことがあっても、普通の生活が繰り広げられるのよね。やりたい人がもちろん来るし、「手伝ってよ」って言えば、「行こうかな」って言ってくれたり…。そういうことが自然に出来るようになってきている。

I：他のクラスに入っていても、他のクラスの人たちが自然にいろいろ言うてるの。前だと「どうして、I先生はここに来たの」とか言ってたのが、「セロテープとって」とか「ここどうやるのかな」とか「今、泣いている人がいて困った」とか…。MM子ちゃんのお弁当の時、K組に入った時もそうだったし、困った時にその辺にいる人をつかまえて。そうそう、T夫くん（3歳）も、昨日おもち食べてたら、前に来て（シャツを）ベロツとしながら、ここ出ちゃってるからやってくれって。Y組がトイ

レに近いからかな？ これ出ちゃったからやってくれって。

D：そういうことが自然になってる。

G：きのうMK子ちゃんが「U組の先生留守だから」って来て、指編みの…「絡まったから教えて」って。

D：昨日はK夫くんがお餅つきしてた時、トイレに行きたくなって、H組を通って行ったんだけど、U組だと思いこんでいて、出てきて、「K夫の靴がないんだけど。ここから入ったんだけど、靴がない」パッと見たらH組にあって「K夫くんあっちよ。あっちから入ったのよ」って。

I：すごいですよね。かわいってというか、前はピリピリっていうか、人に対して難しかった。それが困った時に、そうやっていろんな人に言えるんだもの。

(後略)

あ と が き

— 研究の成果と今後の課題 —

今年度から3年間、幼稚園と小学校の連携に関する教育課程の研究開発の指定を受け、研究に取り組み始めた。小学校との合同の研究会などの場で、幼児の主体性の尊重、幼児自身の生活の尊重という自分たちの保育の基本について語っても、なかなか小学校サイドには理解してもらえず、教育というからには教師（保育者）の意図というものがあるはずで、その意図というものをわかりやすい形で示してほしいということをつきつけられてきた。そこで、自分たちの中ではお互い共通理解をしたものとして進めてきている保育・教育に関する考えを、もっと分かりやすい形で外の世界に伝えていく、表現していく方法を探ることが緊要な課題となった。先ず自分たちが日々取り組んでいる保育というものを自分たちで今一度見直して、子どもたちの姿から何を読み取って、日々の保育の中でどういうことを子どもたちの中に育てようとしているのか、今の子どもたちの姿にそって私たちが行っている保育の実際により近い形で、まずは幼稚園3年間の教育課程を新たに編成することから着手した。

私たちは、子どもが生活する環境を大事に考え、その環境に子どもたちが主体的に関わって自分の活動、自分の生活を展開していけるようにしていこう、幼児自身の生活を最大限尊重していこうという姿勢を持って、長年保育に取り組んできている。また、現行の幼稚園教育要領においても、幼児期にふさわしい生活を展開して、その生活を通して、幼稚園教育の目標を達成することが幼稚園に求められている。一体、「幼児期にふさわしい生活」とはどのような生活なのだろうか、また、「生活を通して」幼稚園教育の目標を達成するとはどういうことなのだろうか。「幼児期にふさわしい生活」といっても、幼稚園にいる全期間いつも同じではないはずである。幼稚園で生活を重ねていく中で、子どもたちの成長、変化にしたがって、「ふさわしい生活」の姿も変っていくのではないか。このような思いから、「幼稚園での生活」を捉え直し、私たちが大事にしている「幼児自身の生活」ということを視座において、教育課程を編成していく方向性が次第に明確になっていった。その方向性で「幼稚園での生活」を捉え直ししていくうちに、下記の5つのステージに分けて、子どもの姿、子どもの生活を整理していくことになった。

ステージA：幼稚園の生活に会い、その中で自分なりに安定していく

ステージB：幼稚園での生活の仕方がわかり、安定して生活を広げていく

ステージC：生活の中で関わりあいがある、心がゆれる

ステージD：友だちとの関わりが深まり、生活する楽しさを味わう

ステージE：一人一人が充実して過ごし、仲間と共に生活を創り出していく

各ステージで、子どもたちが自分、人、もの・事象にどのように関わりながら生活を繰り広げているのか、繰り広げて欲しいのか、関わり方の視点から各ステージの生活の内容と保育者の意図を教育課程にまとめた。

今回の紀要のⅠ～Ⅲでは、ステージA（Ⅰ. 子どもと保育者で創っていく生活）、ステージC（Ⅱ. 自己の育ちに目を向ける）、ステージE（Ⅲ. 子どもと保育者が創り出す生活）の子ども事例を複数取り上げ、一つひとつの事例について実践者が詳細に考察をしている。

各章にあげられている事例は、実践者も違っているし、一人の幼児の事例を時系列で追ったものでもない。敢えて言うならば、バラバラの事例である。しかし、共通しているのは、その事例の中で、各実践者は、その状況、そこに登場する子どもたちの「今の生活」と向き合って、悩んだり、迷ったり様々の思いを持ちながらも、子どもたちを支え、共に生活しようとしていることである。こうした様々な一見するとバラバラに思える事例を省察して掘り下げていき、それぞれを関連づけて総合して分析することで、それぞれのステージでの生活の姿、それを受けての保育のあり方が少しずつ明らかになってきた。

それぞれの考察は冗長なところもあるが、自らの実践を振り返り、多面的に自分の保育を見つめ直すことを抜きにして、保育の質をあげていくことはできないし、又、各ステージの子どもの生活を充実させていくこともできないと思う。そういう意味で、今回の研究は、明らかになってきた各ステージの保育の本質はもちろんのこと、各実践者にとってはそれぞれの実践を深く省察したことに大きな意味があったと考える。

この研究を通して、各ステージで、先を急がず、個々の子どもたちと向き合って、保育者が共に生活するものとして日々の生活を充実させていくことが何よりも重要であることを再確認した。

IVでは、幼稚園の生活の中での保健室の果たす役割を捉え直してみた。子どもたちは自分たちの生活の中にうまく保健室を位置づけて、保育室の喧騒から逃れて静かに本を読んで過ごしたり、自分を取りもどしたりしていることがわかった。子どもたち一人ひとりの生活の中で、保健室がより意味のある役割を果たせるように、養護教諭と保育者の密な連携を心がけていくことが重要である。

Vでは、幼稚園の生活のなかでの異年齢の関わりを取り上げた。幼少連携の研究開発課題の副題として「関わりあって学ぶ力の育成」ということを掲げており、それを受けて、昨年度の後半から今年度にかけて、これまで以上に、異年齢の関わりということ意識して保育を進めてきた。その成果とも言えるが、保育者が意図的に働きかけなくとも、日々の生活の中で異年齢の子どもたちの交流が増えてきている。ここでは、一週間以上に渡って続いた年長児と年少児の交流の事例を細かく分析して、異年齢交流の要点を明らかにした。異年齢交流という視点で、保育を見直してみても、かかわる力を育てることが、一人ひとりの育ちにつながるということを改めて感じた。

今年度は3年という限られた期間での研究開発の1年目ということで、もっと目に見えた研究の成果を求められていたのかもしれないが、幼稚園の研究としては、当初の目的の自分たちの保育をまず捉え直すことに留まってしまい、自分たちの保育を分かりやすい形で伝えていくという点でも十分に目的を果たせたとはいえない。

この一年、幼小の間では、合同の研究会を何度も持ち、お互いの教育・保育の擦りあわせを行ってきた。次年度は、幼稚園としては今年度まとめた教育課程をもとに実践をすすめて、小学校の教育課程への滑らかな接続を見通して、教育課程を修正していくことが課題である。特に幼小の接続期に関しては、ステージの考え方が発展的に小学校段階に引き継がれることも含め、接続期の教育課程をきめこまかく設定して、具体的に実践して検証していくことが課題である。

(研究主任 伊集院 理子)

研究同人

園長	片岡 康子
副園長	梶田 正子
	吉岡 晶子
	伊集院 理子
	上坂元 絵里
	高橋 陽子
	佐藤 寛子
	清宮 総子
	渡邊 満美

お茶の水女子大学附属幼稚園 保育の研究 第6巻

平成14年2月20日発行

発行 お茶の水女子大学附属幼稚園
幼児教育研究会

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1
TEL. 03-5978-5881
FAX. 03-5978-5882

印刷 田畑謄写堂

〒112-0012 東京都文京区大塚3-6-6-201
TEL. 03-3941-1329